

日本語俗語の音声的特徴

町 博 光

1 俗語の認定

俗語は、日常的なものの意で、雅語に対する用語として意識されることが一般的である。『国語学大辞典』（1980）では、「日本では『俗語』という語は『風土記』『万葉集』から出現し、『方言』をさす。（略）平安時代によって（略）『世俗語』と称されて歌語に対する普通語を指し、江戸時代に入ると国語学者たちの歴史観に裏付けられて、雅語と明確に対立し、雅言—平言—俗言の系列で捉えられる」（寿岳章子執筆）と説明している。つまり、中央と異なる語、また和歌や俳句などの詩的表現や文語文に使われない語を俗語としているのである。しかし、この定義では、現在の通行の俗語の意味としては広すぎると思われる。これに従えば、日常会話全般の用語がすべて俗語になってしまうことになる。

一方、俗語の社会的な側面に注目して、『新明解国語辞典』では、「内側の間柄・親しい関係にある相手との間に行われる」（3版）ことばであり、したがって「話し言葉の中で、内容的に卑猥にわたったり下品に流れたりする点があるため、人前でおおっぴらには使用することがはばかれる表現」（4版）としている。たしかに俗語には、隠語・通語・集団語の要素が多分に残されている。しかしこの規定では、いわゆる隠語と俗語との境界がなくなってしまうと考えられる。特に、「くらす」「ぐれる」「ごねる」「さぼる」「ぶらつく」といった動詞や「がっばり」「げたげた（笑う）」「べちゃくちゃ（喋る）」といった副詞や擬声語擬態語といったものが、俗語から除外されてくる。

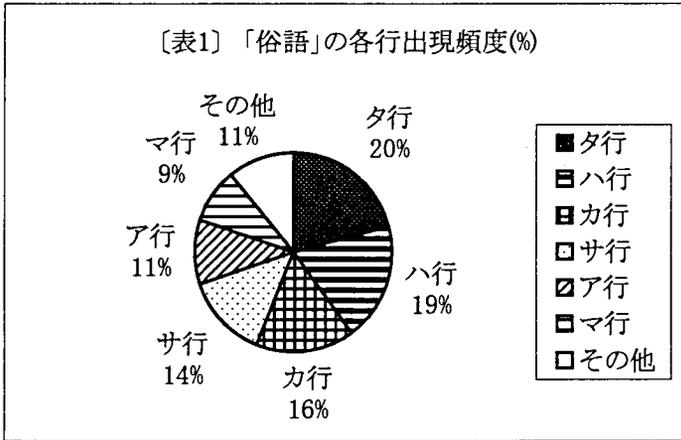
本稿では、俗語を「日常の話し言葉に使われる当世風のニュアンスを持った上品でない言いかた」と規定しておくこととする。したがって、「先」に対する「さきっちょ」や「つまる」の「どんづまり」、「ぴしゃり」の「どんびしゃり」など接尾辞接頭辞による話し言葉の強調効果をねらった表現も俗語の範疇に入れることとなる（注1）。

以下には、現代日本語の俗語がどのような音声的な特徴を持っているかについて、「俗語一覧表」（注2）に基づき考察を加えたい。

2 俗語の語頭音の特徴

日本語の俗語の語頭音は、全体としてどのような音に傾いているのか、その傾向を以下に探っていきたい。表1は「俗語の各行出現頻度（%）」を示したものである。

また、表2には、俗語の語頭音の特徴を日本語全般の特徴と比較して把握するために、「日本国語大辞典」の単語、各行音出現頻度(%)」を示している。「日本国語大辞典」を日本語全般の特徴として参照しているのは、時間的に80年以上、収録語数で10倍以上の開きがある辞書(「言海」)との比較においても、「語頭音の分布がよく似ている」という調



査結果が得られているからである (注3)。

表2 「日本国語大辞典」の単語の各行音出現頻度(%)

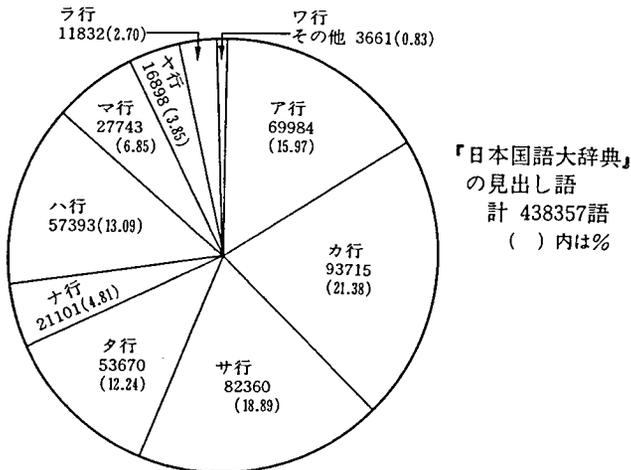


表2によると、日本語全般の語頭音は、1. カ行 2. サ行 3. ア行 4. ハ行 5. タ行の順になっている。表1の俗語の語頭音では、1. タ行(濁音を含む) 2. ハ行(濁音半濁音を含む) 3. カ行(濁音を含む) 4. サ行(濁音を含む) 5. ア行の順になって

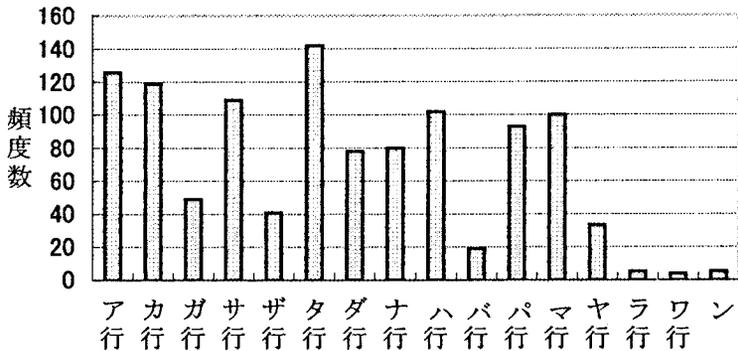
いる。明らかに両者には違いが認められる。俗語の特徴がここに反映されていると考えられる。表1と表2との比較から読み取れる特徴は次の4点に大きくまとめることができよう。

- (1) 日本語全体の語頭音ではカ行が1位なのに、俗語ではタ行が1位になっている。
- (2) 日本語全体では3位のア行が、俗語では5位になっている。
- (3) 日本語全体の語頭音では4位のハ行音が、俗語では2位になっている。
- (4) カ行サ行の順位は、日本語全体では1位2位、俗語では3位4位と変わらない。

俗語の順位がタ行→ハ行→カ行→サ行となっているのは、これらの行がいずれも濁音を含んでいる行であることが注意される。濁音の持つ語感(重・大・鈍・雑)が俗語の形成に有効に関連しているものと考えられる。また、俗語でタ行音が1位なのは、接頭辞「とっ」(取り)「つつ」(突き)や拗音「ちゃ」「ちよ」などによる語の形成が盛んであることがその理由と考えられる。ハ行が2位というのも、接頭辞の付加が原因と予想される。

以下には、このような観点から、各行にわたって語形成の様相を詳しく見ていきたい。あわせて、俗語の音声変化や接頭辞接尾辞による語形成についても観察していくこととする。表3は、各行の俗語の出現頻度を示したものである。

表3 俗語の語頭音出現頻度(俗語総数1105語)



2. 1 語頭音タ行ダ行の語彙

タ行の語頭音をもつ俗語の総数は142語である。内訳はト40語、チ36語、タ26語、ツ25語、テ15語である。トが多いのは、「とちめる」「とっくみあい」「とっとき」(取っておき)などの接頭辞「とっ」や「とんがる」(尖る)「とんずら」(逃げること)などの「とん」が使われている語が多いからである。チが多いのは、「ちゃう」(てしまう)「ちゃんちゃんおかしい」の「ちゃ」や「ちょんぎる」(ちょん切る)「ちよるまかす」などの「ちよ」の拗音が多く使われているからである。

同様のことがザ行についても言えるようである。総数78語、内訳は、ド31語、テ30語、ダ16語、ヅ1語である。ドは「どちくしょう」「どまんなか」や「どんじり」(最後)「ど

んづまり」のような接頭辞として使われている。

接頭辞による強調の効果をねらった表現が俗語の性格の一端であることが了解される。

2. 2 語頭音ハ行バ行バ行の語彙

ハ行音102語、バ行音19語、バ行音93語がその内訳である。へ23語、ヒ23語、ハ21語、ホ18語、フ17語と各音が平均的に見られる。へは「へったくれ」「へっちゃら」「へっぼこ」などが目立つ。ヒには「ひんまげる」「ひんぬく」「ひんむく」などの接頭辞「ひん」(引き)が、フでは「ふんじばる」「ふんづける」「ふんだくる」などの接頭辞「ふん」(踏み)が観察される。

バ行音はボ7語、パ・ピ・ペがそれぞれ4語の総数19語である。

バ行音は、ブ33語、バ24語、ボ13語、ベ9語、ビ3語である。ブには「ぶちこむ」「ぶちこわす」「ぶっかく」「ぶったおれる」などの「ぶち」「ぶっ」(打ち)の接頭辞が見られる。同様に、バには「ばかあたり」「ばかくさい」「ばかちから」「ばかでかい」などの「ばか」が見られる。

2. 3 語頭音カ行ガ行の語彙

カ行音は、総数119語。内訳は、コ34語、ク27語、カ26語、ケ17語、キ17語である。

コには「こてこて」「こてんこてん」「こってり」などの擬声語擬態語が多く、「こんちくしょう」「こんちは」「こな」などの「この」からの音声変化の語が認められる。クには「くそたれ」「くそちから」の「くそ」、「くびったけ」「くびびき」などの「くび」による語形成が認められる。

ガ行音は、ガ15語、ゴ15語、グ10語、ゲ8語、ギ1語の総数49語である。ガには、「がたがた(言う)」「がっぱり」「がちゃがちゃ」などの擬声語擬態語が観察される。ゴには「ごっそり」「ごっちゃ」などの擬声語擬態語と「ごねる」「ごてる」「ごてつく」などの動詞が目立つ。

2. 4 語頭音サ行ザ行の語彙

サ行音は、シ51語、ス26語、サ14語、セ10語、ソ8語とばらつきが大きい。シ音の51語のうち、拗音が、シャ13語、シュ2語、ショ16語あり、俗語における拗音の働きの大きさを確認できる。シャ音には「しゃかりき」「しゃしゃりでる」「しゃらくさい」などがあり、ショ音には「しょげる」「しょっぱい」「しょびく」「しょぼつく」などがある。

ザ行音には、ズ16語、ジ15語、ザ6語、ゾ3語、ゼ1語、総数41語がある。このうちズには、「ずけずけ」「ずっこける」「ずぶとい」などがあり、ジには「じゃかすか」「じりひん」などがあるが、シ音のような偏りは見られない。

2. 5 語頭音ア行の語彙

ア行音は、オ49語、ア44語、イ17語、ウ13語、エ3語で総数が126語である。このうちオは、「おなら」(おー鳴ら)「おーにもつ」(厄介物)「おーばけ」(お化け物)「おーべんちゃら」(口ばかりうまいこと)「おーませ」(ませていること)「おーまんま」(ご飯)

「おーめだま」(叱ること)のように丁寧化することによって、逆に俗的なニュアンスを生み出している。俗語の形成法として注目しておく必要があろう。

マ行音以下は省略にしたがう。

3 俗語形成の音声変化

俗語と考えられる語は、いわゆる普通語(注4)からどのような音声変化を経て成立しているのだろうか。ここでは俗語形成の観点から、俗語の音声変化を見ていきたい。

俗語を形成する音声変化は、大きく、特殊音に関わるもの、拗音に関わるもの、子音変化に関わるものに三分類される。

3. 1 特殊音に関わるもの

3. 1. 1 促音

(1) 促音添加

あまたるい(甘たるい)→あまったるい ありたけ→ありったけ
くびたけ(首たけ)→くびったけ しらばくれる→しらばっくれる
せつく→せつつく ひろば→ひろっば ばかり→ばっかり
みそかす→みそっかす

無声子音の前に促音を挿入することによって、強調やぞんざい感や愛らしさといった俗語の表現効果をそれぞれの語に与えていよう。このさい、たとえば「あまったるい」は俗語として認定できるだろうが、「塩からい」の「塩っからい」を俗語と認定することはできない。促音添加による俗語の形成も語ごとに認定が異なってくることになる。

(2) 促音化

へいちゃら→へっちゃら 差し引く→さっぴく 盗人→ぬすっと 打ち遣
る→うっちゃる 打ちたまげる→ぶったまげる 打ち千切る→ぶちぎる
取り組み合い→とっくみあい 蹴り飛ばす→けっ飛ばす

複合語の前部要素に促音化がおきることが多い。この前部要素は、接頭辞となって俗語の形成に関わることとなる。

3. 1. 2 撥音

(1) 撥音添加

～たび→～たんび みな→みんな ～なぞ→～なんぞ くだり→くんだり
とがる→とんがる とび(鳶)→とんび

撥音が添加されるのは有声音か鼻音の前である。また撥音化されるのも、「～たび」「～なぞ」といった文法要素的な語が多いことが指摘できよう。

(2) 撥音化

この→こん もの→もん ものか→もんか 雌→めん 踏みつける→ふ
んづける つまらない→つまんない 突きのめる→つんのめる 引き曲が

る→ひんまがる　引き剥く→ひんむく　打ち投げる→ぶんなげる

代名詞や文末詞、一般名詞や形容詞また接頭辞要素などに、はばひろく撥音化がおこっている。撥音化が俗語の多彩な表現をささえていると言えよう。

3. 1. 3 長音化

かか(嬢)→かかあ　じじ(爺)→じじい

「俗語一覽」に取りあげられているのはこの2例である。特殊音の中で、長音は、促音や撥音とくらべると、それほど大きなはたらきはしていない。

3. 2 拗音に関わるもの

これは→こりゃ　～てしまう→～ちゃう　～には→～にゃあ　さくる→しゃく
る

俗語が語のレベルの問題であるとしたら、「これは」「～てしまう」「～には」は表現のレベルの問題であり、俗語の範疇に入れることはできないだろう。しかし、辞書の多くがあるいは多くの日本語の話し手がこういった表現を俗語の表現とみなしている。ここに取りあげておくこととする。

3. 3 子音変化に関わるもの

3. 3. 1 濁音化

さま(様)→ぞま　つけつけ→ずけずけ

「あおびょうたん」(青鞥筆)や「あかがみ」(赤紙)といった連濁によるものも俗語として取りあげられているが、これらは一般的に連濁をおこした語形で日常会話に用いられている。「あおびょうたん」の下降性の意味特徴、あるいは「あかがみ」の特殊語としての意味特徴から、俗語として取りあげられたものと判断できる。したがって連濁をおこした語をここにすべて取りあげることはしない。

「ぞま」「ずけずけ」は、下降性の意味で使われることが多からう。

3. 3. 2 破擦音化

とばしり→とばっちり　ごった→ごっちゃ

これらも下降性の意味傾斜が認められよう。

以上、俗語形成のさいの音声変化の特徴を検討してきた。特殊音と言われて特殊視されている促音・撥音・(長音)が、俗語の形成にいかにおおきな役割を果たしているかということをあきらかにすることができた。特殊音節を使用することで、人をののしり、からかい、馬鹿にする下降性の意味合いを強調したり、話し手の発話にぞんざい感を与えたりするのである。そのような会話ができるのは、とりもなおさず「内側の間柄・親しい関係にある相手との間に行われる」場面となる。このような機能がより強調されると、それが隠語となっていくのである。

4 俗語の形態的特徴

4. 1 俗語としての擬声語擬態語

俗語の形態的特徴として、接辞による語形成と反復形式をとる擬声語擬態語の多いことが指摘される。接辞の使用については語頭音の説明の所(「2. 3語頭音カ行ガ行の語彙」など参照)でもふれることがあった。ここでは、俗語と考えられる擬声語擬態語の反復形式の音声的な特徴を見ていくこととする。

浅野(1978)は、「擬音語、擬態語はくだけた話し言葉的な、さらには、俗語的な語であると意識されている」と述べている。このことは、日常会話や漫画等で擬音語擬態語が頻出することからも理解されることであろう。しかし、擬声語擬態語がすべて俗語かという点、それは否定せざるを得ない。たとえば、『新明解国語辞典』(4版)では、「がたがた」を「強く震える様子」の場合は俗語とされていないが、「うるさく不平などを言う様子」の場合には俗語とされている。

「俗語一覽」に採録された擬声語擬態語のうち、「おたおた」のような反復語形の重複語が41語あった。そのうち擬態語と考えられる語が「おたおた」「ずけずけ」など36語、擬声語と考えられるのが「げたげた」の1語であった。この他、「がちゃがちゃ(クツワムシの俗称)」「かんかんむし」(注5)「きちきちばった(精霊ばった)」「パンパン」のように、擬声語擬態語からの転用が4語あった。

俗語としてあげられた擬声語擬態語は、反復形をとるものがほとんどである。なかでも、人の動き、感情、表情を表す語が27語と大部分を占めている。このことは、俗語が、対人関係の中でもっぱら使われる語であることが指摘できよう。27語のうち、「へろへろ」「げそげそ」「つけつけ」「でれでれ」「ずけずけ」など、下降性の意味のものが22語ある。

反復形式をとる擬声語擬態語においても、マイナスイメージのものが俗語と認定されていることになる。

4. 2 反復語形の音評価

俗語の反復形にはどのような音構造の特徴が見られるのだろうか。母音と子音の両方から見ていこう。各音のイメージについては、浅野(1978)および金田一(1988)を参考にしている。

4. 2. 1 母音

① [e] 母音

げそげそ げたげた けちよんけちよん でれでれ べいべい へろ
へろ

笑い方の「げそげそ」「げたげた」は品のよい笑い方ではない。「でれでれ」「へろへろ」も品のよい態度とは言えず、「けちよんけちよん」も「べいべい」も下降性の意味を表す。

② [i] 母音

ちびちび　ちびりちびり　ちまちま　ちゃかちゃか　ちよくちよく

[i] の音を持つ語は、小ささ、速さを表している。反復語形の中で三分の一の割合を占めている。

③ [a] 母音

がたがた　ばんばん

程度のはなはだしさを形容している。

④ [o] 母音

おたおた　こてこて

[a] 母音と同様、程度のはなはだしさを表している。

4. 2. 2 子音

①濁音

ばんばん　げそげそ　げたげた　じゃらじゃら　ずけずけ

濁音は、鈍いもの、重いもの、大きいもの、程度のはなはだしいものを表している。

②拗音

めちやめちや　むにやむにや　けちよんけちよん　ちゃかちゃか

拗音は、下降性の意味を表すことが多く、直音に対してより俗語的で品が落ちる。

以上、反復語を、擬声語擬態語を中心にして、音声の面から観察した。母音では、あまり品のよくない感じを与える [e]、程度の極端さを表す [a] [i] が多く使われている。子音では、鈍さ、重さ、程度のはなはだしさを表す濁音、直音とくらべて品位の落ちる拗音が俗語の反復語に多く見られた。ここでも、俗語の意味的特徴である、意味の下降性の傾向が観察された。反復形をとることの多い擬声語擬態語は、下降性の意味をこれらの音に委ね、反復させることによってよりその表現の効果を高めていると言えよう。

5 接辞の音形態

俗語に特徴的に表れる接辞に、なにか音的特徴は見られないものだろうか。接辞が付いた語は、それらすべてが俗語とみなされるのだろうか。「俗語一覧表」より特徴的な接頭辞・接尾辞を持つ語を抜き出して、この問題を考えてみる。

5. 1 接頭辞

①「くそっ-」　くそつたれ

②「くっ-」　くつつく

③「すっ-」　すっからかん　すっこむ　すってんでん　すつとほける　すつとんきょう　すつぽかす　すつぽんぼん

④「そんじょ-」　そんじょそこら

⑤「つん-」　つんのめる

- ⑥「とっー」 とっつかまえる とっばずれ
- ⑦「どてっー」 どてっばら
- ⑧「ひっー」 ひつつく
「ひんー」 ひんまがる ひんまげる ひんむく
- ⑨「ふっ」 ふっとばす
- ⑩「ぶっー」 ぶっかく ぶっかける ぶっきる ぶっきらほう ぶっこぬく ぶっこむ ぶったおれる ぶったぎる ぶったくる ぶったたく ぶったまげる ぶっちぎる ぶつつぶす ぶつとおす ぶつとばす ぶつとばす ぶつとぶ ぶっぱなす ぶっぱらう
- 「ぶんー」 ぶんなぐる ぶんなげる
- 「ぶちー」 ぶちころす ぶちこわす ぶちまける
- ⑪「まっー」 まっばだか まっびるま まっぶたつ

接頭辞の「ぶっ／ぶん／ぶち」の使用頻度がきわめて高く、それに「すっ」「ひっ／ひん」が続く。

音声的にみると、「す」「ひ」「ふ」などの摩擦音が多く、「ど」「ぶ」の濁音の使用もめだつ。また接辞の末尾音節は、「そんじょ」と「ぶち」を除いてすべて特殊音の促音と撥音であることが注目される。俗語の認定・意味との関係から考えて、この理由は明白だろう。

「すっー」「くっー」などの「摩擦音＋促音」には、切れの良さ、瞬間性を強調する効果がある。また濁音や撥音には、強さ・重さを強調する表現上の効果を備えている。特に濁音は、聴覚的に良い印象を与えない傾向があるので、動作や様子・有様にマイナスの意味を生じさせることが多い。

俗語の語頭音にも、いわゆる特殊音の使用の多いことが指摘できた（第3章）。俗語の語形成には、接辞のレベルにおいても特殊音・濁音の使用の多いことが確認される。なお、特殊音・濁音と同様に外来語音とされるラ行音が、俗語の語頭音としては使用されないことも注目しておく必要があろう。

5. 2 接尾辞

- ①「ーけ」 まっくろけ まっしろけ
- ②「ーこい」 ねちっこい
- ③「ーす」 かます
- ④「ーちい」 まるまっちい みみっちい
- ⑤「ーちよ」 さきっちよ ぶきっちよ ふとっちよ
- ⑥「ーつく」 がつつく
- ⑦「ーば」 はっぱ

⑧ 「-ば」 おっぱ さきっぱ

⑨ 「-ぼち」

⑩ 「-ぼっきり」

⑪ 「-ぼっち」

⑫ 「-め」

⑬ 「-らしさ」

⑭ 「-る」 かもる サボる ぐるちる けちる

俗語を形成している接尾辞を「俗語一覧表」から抜き出すと以上ようになる。このうち、「-らしさ」や「かます」を形成する「-す」、「かもる」「サボる」を形成する「-る」などは、俗語に限らず一般的な語形成要素であろう。俗語形成のための接尾辞の認定はむずかしい。

音声的な特徴を言えば、「-ば」「-ぼち」「-ぼっきり」「-ぼっち」「-ば」などの半濁音の使用が多いことが指摘される。同様に、「-ちい」「-ちよ」の破擦音の使用も目立つ。半濁音や破擦音の効果が、「小ささ」や「かわいらしさ」といった意味を付与すると同時に「話し言葉らしさ」を与えていると考えられる。

6 まとめ

以上、日本語の俗語を音声的・形態的な側面から考察してきた。俗語に特徴的な音声としては、いわゆる特殊音、濁音それに破擦音が多く表れるということである。特殊音は、擬声語擬態語を形成し、音変化によって俗語的な語を形成し、また接頭辞や接尾辞が形成する俗語の中でも重要な役割をになっている。

外来語音としての特殊音節が、現代日本語の日常会話において、強調効果やある種の下降性の表現効果をもたうものとして不可欠のものとなっている。「特殊」音節は、もはや特殊でなく日常性あふれるものと位置づけられる。

(注1) 逆に、接辞が付けばすべて「俗語」であるとはできない。「どまん中」は俗語であっても、「真ん中」「真中」を俗語とするには異論があろう。

(注2) 「俗語一覧表」は1993年度の「日本語位相論演習」で演習参加者が分担作成したものである。「日本語大辞典」(1989:講談社)および「新明解国語辞典」(1992:三省堂)の「俗語」表記のあるものを中心にし、これにテレビやラジオなど日常会話から若干を補って作成した。本稿は、この「俗語一覧表」をもとに演習の場で発表した「俗語の音韻的・形態的特徴」(中尾道子・津守陽子)を参考にしている。また、「俗語一覧表」をもちいて、すでに「日本語俗語の意味特徴」『日本語表現法論叢』(漢水社:1999)を発表している。

(注3) 松井栄一「『日本語大辞典』収録項目分布表」(『国語展望』臨時増刊、1979)

(注4) 日常会話の中で下品な感じを伴わないで用いられることば。鹿児島地方で言う「地域共通

語」とは意味を異にする。

(注5) [「かんかん」とたたきながら作業をするところから] 煙突・ボイラー・汽船などの錆落としをする作業員の俗称。(『日本語大辞典』)

参考文献：浅野信『俗語の考察』（三省堂、1950）

浅野鶴子『擬音語擬態語辞典』（角川書店、1978）

金田一春彦『日本語百科大辞典』（大修館書店、1988）

鈴木孝夫『日本語の語彙と表現』（大修館書店、1985）

日向茂雄『擬音語・擬態語の本』（小学館、1991）

村木新次郎『日本語動詞の諸相』（ひつじ書房、1992）

——まち・ひろみつ、本学教育学部教授——